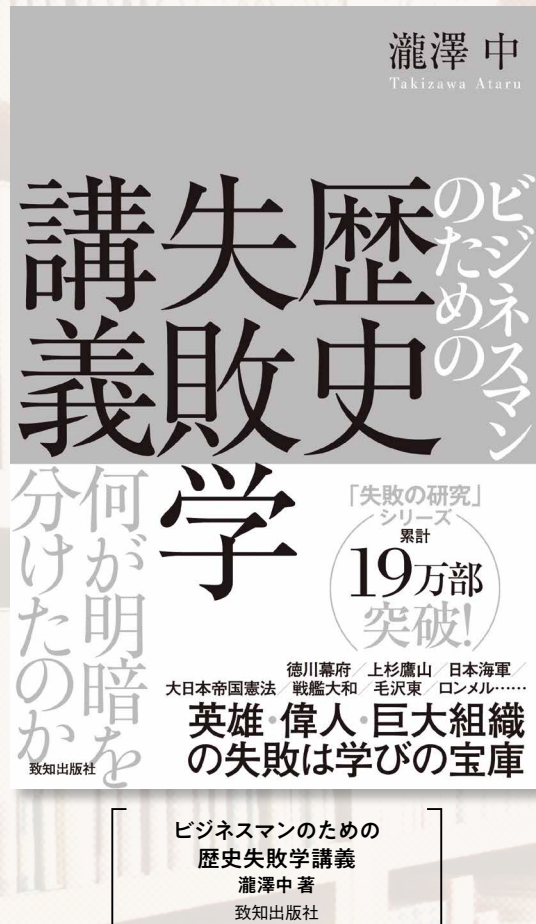




おすすめの一冊

瀧澤中『ビジネスマンのための歴史失敗学講義』



私のおすすめの一冊は、瀧澤中著の『ビジネスマンのための歴史失敗学講義』です。書名の通り失敗学の講義です。歴史上の事実に基づいて書かれている本を読むと「なぜ？」と思う場面に出会うことはないでしょうか。そのなぜ（失敗）を学ぶ大切さを教えてくれる本です。歴史好きの方もそうでない方も、気軽に読めるかと思えます。

本書では、多くの人物の失敗事例を紹介しているのですが、例えば上杉鷹山です。上杉鷹山といえば、「何事も成らぬは人の為さぬなりけり」の名言。そして、第35代アメリカ合衆国大統領ジョン・F・ケネディが「尊敬する人物」として挙げたことでも有名です。失敗と結びつきそうにない人物に思えます。鷹山の改革は、徹底した倭約を行いつつ、殖産興業で米沢織などの名産品を作り、その利潤で借金を減らすことでした。「入るを量りて出るを制す」を実践し、藩の財政改革を行いました。

しかし、本書では、最大の失敗は、鷹山改革の着手から56年の歳月を経て藩財政の累損をなくしたことであります。これほどの長期間改革を続けてこられたことが驚異的であるとしつつ、「天明の大飢饉」では多くの餓死者を出してしまっています。時間がかかればかかるほど、被害に遭う人が出てし

まうわけです。現代に役立てようとした場合、そのかかりすぎた時間は気になるとしてあります。著者によれば、「失敗の標本」が歴史には満載されていて、歴史とは、すなわち「失敗の宝庫」。英雄・偉人・天才・有能な指揮官や名君といえる人も、巨大な組織や完璧にみえるシステムも、多くの失敗をしています。偉人や英雄たちですら失敗をするのですから、基本的に人間誰しもが失敗を冒すかもしれません。

もちろん、戦国時代の状況が現代に起こるはずはありませんが、なぜその時そういう判断をしたのかという思考や方向性は、現代の私たちに通じることがあります。「失敗とは、成功にかける、はしごのようなもの。だから成功した人は誰もが失敗している。失敗を糧にして、より大きな目標に向かって戦いを挑む人と、失敗を認めず、失敗に気づかず、取り返しのつかない放置する人では、結果はおのずと違ってくる」と述べています。最近では、小さな失敗もしたくないと考える人が増えているようですが、失敗から得られる教訓を活かすためになるのが本書かと思えます。歴史での失敗を「学びの資源」として活用することで、自分自身の成長に役立てるきっかけにはいかがでしょうか。

三橋 裕行

みつはし ひろゆき

日本家族計画協会代表理事。1984年第二地銀入行。1990年保健会館健康教育推進本部入職（1999年日本家族計画協会と組織統合）。健康教育全般における、指導者養成セミナーや健康支援教材の企画・制作・頒布等事業に従事し現在に至る。